07年エビ類

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

年	数量 輸入 活	輸入 ｲｾｴﾋﾞ	輸入 冷ｴﾋﾞ	東京 生車	東京 冷輸入	家計消費 生（ｸﾞﾗﾑ）	在庫	価格 輸入 活	輸入 ｲｾｴﾋﾞ	輸入 冷ｴﾋﾞ	東京 生車	東京 冷輸入	消費支出 生（円）
18	1.4	5.9	230.7	0.5	16.1	2,003	84.2	3,958	2,296	992	5,146	1,341	3,716
19	1.1	5.6	207.9	0.5	15.0	1,902	80.8	4,256	2,711	991	5,575	1,357	3,632
%	80	94	90	97	94	95	96	108	118	100	108	101	98

輸　入　国（冷エビ類）　　単位:千トン

年	中国	ﾐｬﾝﾏｰ	ﾍﾞﾄﾅﾑ	ﾀｲ	ﾌｨﾘﾋﾟﾝ	ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ	ｲﾝﾄﾞ	Gﾗﾝﾄﾞ	ｵｰｽﾄﾗﾘｱ	ｶﾅﾀﾞ	ｴｸｱﾄﾞﾙ	ﾛｼｱ	調整品
18	22.8	8.8	51.1	20.1	5.3	43.7	28.5	6.8	3.2	8.7	0.8	9.5	50.0
19	24.0	8.0	40.0	26.4	4.3	37.1	27.0	5.4	1.9	7.6	0.7	8.9	48.2
%	105	91	78	131	80	85	95	80	60	87	95	94	96

輸　入　の　動　向

19年の冷凍エビので、20.8万トンで前年（23.1万トン）を下回った。

アジアでは中国を始めとしてバナメイ生産が増大しており、世界的にはエビ生産の６０％を占めるようになり、ついにＢＴ、天然ホワイトを抜いて種としてトップにたった画期的な年になった。

エビだけではなく、他魚種も含めて買負け現象は顕著で、エビでは米国、EU、アジア諸国との競合がある。ただ米国も下半期のサブプライム問題もあって、需要後退の局面もみられ、輸入は若干減少している。

冷凍エビ輸入価格は、991円でほぼ前年（992円）並で推移し、５年続きで三桁（９００円台）の価格となった。

本年は、為替円安スタートから始まり、商社も逆ざや幅の拡大で輸入は停滞した。その後の円高もあったが、結果的には輸入の増加には結びつかなかった。また天然エビも燃油高の影響もあって操業ストップがみられるなど、海外でも燃油高の影響は拡大した。また、国内的には加ト吉問題などもあって、販売には大きな影響が出ていた。

主要輸入国は、引続きベトナムが4万トン(前年5.1万トン)でトップを維持し、次にインドネシア3.7万トン（前年4.4万トン）であったが両国とも上半期の抗生物質問題による輸入の停滞もあって減少が目立ち、数量の減少が顕著であった。続いてインドが2.7万トン（前年2.9万トン）で、また中国も2.4万トン(前年2.3万トン)と養殖バナメイ主体に若干増加した。

また、赤エビは刺身需要も安定・定着しているが、本年は前年来のアルゼンチンエビの在庫の滞留もあり、カナダとグリーンランドがそれぞれ7.6千トン（前年：8.7千トン)、5.4千トン（前年：6.8千トン)と今年も何れも前年をやや下回った。続いてロシアでもほぼ8.9千（前年9.5千トン）であった。

また、近年原判需要に代わり増加基調にある製品であるが、本年は調整品の輸入量が4.8万トンで前年の5万トンを下回り、需要も成熟してきていることを伺わせる結果になった。スシエビや尾付きエビ、ボイル、フライ等のころも付き関係はタイ2.1万トン(前年：2.2万トン)や、ベトナム9.1千トン（前年：8.8千トン）、インドネシア6.8千トン(前年：7.4千トン)、中国1.1万トン(1.2万トン)で各国とも頭打ち傾向が出てきている。

在　庫　量

本年の在庫量は、8.1万トンと前年(8.4万トン)をやや下回った。

本年は輸入量の減少があったものの、末端消費の低迷を物語っているとともに、原判需要が一層落ちていること反映したものである。

本年も例年在庫が増加する8月以降、在庫は多くなり、9,10,11月は8万トンを越えたが、輸入量の減少が効いて越年在庫は、８万トン割れの低水準となった。

消費地入荷量と価格

19年の東京消費地における冷凍輸入エビの入荷量は、1.5万トンで前年（1.6万トン）をやや下回り、漸減傾向が続いた。

本年の東京消費地価格は、1,357円で前年（1,341円）を僅かながら上回ったが、輸入価格を反映した格好となった。

本年のエビを巡る特徴は、①前年に比べると当初の為替円安から急激な円高、そして円安、下半期は円高基調と、為替変動がきわめて大きかったこと、②前年来の浜値の高騰の影響による買い控え、そして消費低迷と為替円高もあり浜値の下落による買い足し等、めまぐるしい変化がみられた、③国内的には業務筋での売れ口の悪化と引き続き家計消費も落ち気味(数量、金額)は目立った、しかし価格は安値推移が続いて５年目を迎えた、④上半期には上記のように抗生物質問題もあって、主要国からの輸入減少など、消費に直結するような事態が本年もみられた、こと等である。